

## 冒険心あふれる舞台―「春秋座花形舞踊公演」の挑戦

畑 律江

優美。繊細。そんな形容が日本舞踊にはふさわしいが、実はその核には、豊かな物語性と強い人間感情が込められている。この側面を最大限に引き出そうとした試みが、藤間勘十郎芸術監督プログラム「春秋座花形舞踊公演」ではないか。衣装をつけない素踊りながら、歌舞伎に負けないドラマ性と躍動感で、日本舞踊公演の新たな可能性を示した。

中心となった演目は新作舞踊劇『小栗判官車街道』。小栗判官は語り物である説経節の主人公。早くから浄瑠璃や歌舞伎に取り入れられて「小栗判官物」と呼ばれる作品群を生んだ。戦後はほとんど上演されなくなっていたが、1974年、武智鉄二が監修・演出して、二代目中村扇雀（四代目坂田藤十郎）が『小栗判官車街道』を復活上演。さらに1983年には、三代目市川猿之助（二代目猿翁）が現代感覚を取り入れて『當世流小栗判官』を初演し、人気作に成長させた。今回の舞台は「いつかこの演目をやりたい」と考えていた勘十郎が、先行作の好ましい部分を選び取り、新たな工夫、自らの作曲を加えて舞踊劇として再構成したという。

何より小栗判官役の市川團子がさわやか。序幕での登場が印象的だ。兄の横山郡司をあやめて常陸国の乗り取りを企む横山大膳（勘十郎）と息子の次郎（市川喜猿）、三郎（市川段一郎）が住む館に、郡司の娘で小栗判官の

許嫁である照手姫（藤間勘松音）が幽閉されている。小栗判官はこの館に、なんと京の遊君の姿で乗り込んでくるのだ。團子は女方の仕草、発声を生かし、優雅に舞い始めると、一瞬でさつそうとした若者の姿に変わる。ふと、ヤマトタケルが女装して熊襲を討ったという伝承を思い出した。この登場は74年版『小栗判官車街道』での演じ方らしいが、勇ましさに貴公子の繊細さと憂いが加わる演出で、若い團子の魅力をうまく引き出した。

序幕は、大膳が放った暴れ馬の鬼鹿毛を、判官が乗りこなすのが見どころ。続く二幕は近江国堅田浦が舞台。判官と離れ離れになった照手姫を、漁師浪七、実は横山家に仕えていた忠臣・水戸小次郎（勘十郎）が救う。浪七の女房お藤（花柳双子）の兄・胴八（若柳吉蔵）が漂わせる小悪党の雰囲気面白い。胴八は、姫を売ろうと舟でさらうが、浪七が龍神龍女に命を捧げて舟を波で引き戻す。岩に逆さ吊りになる最期が壮絶だ。

三幕目では、万福長者の娘・お駒（芳澤蒼ろ）が、照手姫を捜して美濃国にやって来た判官を見初め、長者館に連れてくる。お駒の母・お榎（勘十郎）は、もとは照手姫の乳母。館で働く下女の一人が照手姫だと知り、お駒の恋心を理解しながらも、「諦めて下されいおう」と頼む。悪人や忠臣を演じてきた勘十郎が、この場で見せた母親の苦悩が胸に迫る。役柄の表現には、なりかたちでなく、むしろ性根こそが物を言うという事実を改めて感じさせられた。お榎は、お駒ともみあううち、お駒を斬ってしまう。お駒役の蒼ろは、初心だからこそ、亡霊になっても恋を捨てない執着心を説得力ある表現で見せた。説経節では、地獄に落ちた判官が餓鬼の姿で蘇生するが、この作品では、お駒の執念が判官の容貌を醜くし、足腰を立たなくさせる。怪談仕立ての構造である。



あてがわれなかった仲藏。少ない出番を最高のものにするため、単なる盗人を落ちぶれた武士に変え、殺される時に血糊を使うなどの斬新な工夫をこらす。初日は客席が静まり返り、仲藏はそれを不評ととらえたが、たまたま1人の老人が自分の芝居を絶賛する声を聞く。そしてついに5日目に、あの老人の大向うをきっかけに、仲藏の演技を褒め称える喝采が巻き起こった……。

現在の歌舞伎にも受け継がれる、仲藏が生み出した斧定九郎の形。その誕生秘話に迫った話を、伯山は張り扇をパパン！と張りながら語っていく。仲藏や老人を始めとする人物＋ナレーションを一人ですべてこなしていくわけだが、聴いていて驚くのが、それぞれの人物のキャラクターや状況が語りだけで伝わるのみならず、カメラワークまで見えてくるように感じられたことだ。芝居の解説をする際は舞台全体を俯瞰するような風景が浮かび、仲藏の心境が語られる箇所では深刻な表情をアップでとらえているように感じられ、仲藏の演技に客席が静まり返ったり盛り上がりたりする場面では、客席をパン（水平に振る）して観客の表情を見せているように思えてくる。

それは伯山が、声の質やテンポをとにかく明快に、かつ繊細に使い分けている故だろう。たとえば仲藏の声はやや籠もるような質感で、聴く側も少し前のめりに耳をそばだてる感じになる。逆に客席の盛り上がりを生き生きと描写する所では、音をポンポンと遠くに飛ばすような口調で、視線ならぬ聴線（そんな言葉はないけれど）をあちこちに向けさせていく。講談がエンタメと同時に、ニュースやドキュメンタリー的な役割を担っていた、その名残となるテクニクだろうか。伯山が講談ファン以外からも支持されたのは、普段講談を聴き慣れていたな

い人でも頭の中に風景を描きやすく、想像することの楽しさを最大限まで引き出されるためではないか……と思い至った。

もう一つの『淀五郎』は、『中村仲藏』から約20年後の話。駆け出しの役者・澤村淀五郎は『仮名手本忠臣蔵』の塩冶判官役に抜擢されるが、大星由良之助役の市川團藏は淀五郎の演技に納得いかず、切腹の場面で側に寄ろうとしない。淀五郎は、舞台上で團藏を巻き添えにして自刃しようと思いつくが、一人の役者のアドバイスで團藏が求めるものに気づき、翌日の舞台を大成させる。ここで淀五郎に助言を与えるのが、この頃には人氣役者となっていた仲藏なのだ。

『中村仲藏』の時とは違い、芸を極めた名人ならではの達観したような口ぶりに変わった仲藏。淀五郎に、青い染料を仕込んで顔色を変える工夫を伝授しつつも、守るべき「形」は守るよう諭す。功名を上げようと、必死で誰も観たことがない舞台を作り上げてきた仲藏は、一周回って「形」を未来につなぐことの大切さに、どこかの時点で気づいたのだろう。仲藏の20年間の空白にも思いを馳せる心地となる、味わい深い口演だった。そしてそこには、廃れかけていた講談の世界に新風を吹き込み、今まさに次世代にバトンを渡す役割を担っている、伯山自身の誇りと覚悟も込められていたのではないだろうか。

枕では「20時までに舞台を終わらせる」と宣言していた伯山だが、終わってみると10分以上時間を過ぎていた。「聴いているお客様が上手いと、話が伸びる」とも語っていたので、この日の私たちは「上手いお客様」だったのだら

う。講師が一方的に語っているだけのように見えて、実は私たちも無言のうちに、講師を動かすエネルギーとなっていることを、これほどわかりやすく実感できたことはなかった。来年もまたここで、舞台上と客席で良いセッションができることを願っている。

※本稿は、2025年12月2日(火)18時より京都芸術劇場 春秋座にて上演された『神田伯山独演会』について、2025年末に執筆され、2026年1月に舞台芸術研究センターWebサイトにて公開された原稿を転載したものである。

## 京都芸術大学 舞台芸術研究センター 活動記録

京都芸術大学 舞台芸術研究センターでは、ここに記録されているほかに、大学と社会を多面的につなぐことを目的に学内の二つの劇場、春秋座とstudio21を擁する京都芸術劇場において多彩な事業を実施しているが、その詳細は京都芸術劇場公式ウェブサイト (<https://k-pac.org/>) を参照いただきたい。

※特に記載していない公演は舞台芸術研究センターによる主催公演

### 公演事業

#### 一〇二五年度

##### 立川志の輔独演会

四月二一日(金)一六時、二二日(土)一五時、二三日(日)一三時/上演時間一五〇分(休憩一五分含む)/会場 春秋座/出演 立川志の輔、立川志の彦、立川志の麿/志の彦、二一日(金)『紀州』、二三日(日)『お血脈』、志の麿、二二日(土)『厩火事』、二三日(日)『看板のピン』、志の輔、二一日(金)『一三日(日)』『三方一両損』『百年目』/舞台監督 鈴木政憲/照明 阿部康子/音響 原田耕児/制作 西須久子/シノオフィス/宣伝美術 北原和規(株式会社U.M.M)/制作 井出亮、木下瑞、制作助手 出尾美貴、伊村千奈美、劇場管理 神田直美、春秋座劇場管理 舞台 大野淳一郎、照明 小山陽美、音響 神家洋志郎、舞台裏管理 結城敏恵、チケットセンター 関野遊子、玉岡結里子(以上、舞台芸術研究センター)/後援 京都新聞

##### 京都芸術劇場 春秋座 藤間勘十郎芸術監督プログラム

##### 春秋座花形舞踊公演

六月二二日(土)一六時、二二日(日)一三時/上演時間二四〇分(休憩二〇分含む)/会場 春秋座/演目 當世流小栗判官より 新作舞踊劇『小栗判官軍街道』長唄連中、『華舞競歌舞伎彩』舞踊『新鶯娘』長唄囃子連中、舞踊『鬼揃紅葉狩』長唄連中・箏曲連中/出演 藤間勘十郎、市川園子、芳澤若くは、若柳吉蔵、藤間勘松音、若柳延佑、若柳竜公、坂東はつ花、藤間勘知恵、花柳双子、花柳寛七郎、花柳仁四郎、藤間勘光、中村梅壽、花柳禮志月、藤間勘綾恵、藤間勘華乃、藤間康詞、藤間智基、市川段之、市川猿四郎、市川猿紫、市川喜猿、市川段一、市川三四郎、市川翔乃亮、市川喜介、長唄 日吉小八郎、杵屋勝英治、杵屋五太郎/三味線 今藤佐敏郎、今藤龍十郎、杵屋小三郎、杵屋勝司郎、東音坂田舞子/鳴物 望月大津之、梅屋右近、中村寿鶴、中村寿慶、藤舎伝生/箏 菊武粧子、中嶋ひかる/狂言方 笠井直明/附打 岡本章吾/美術 前田剛/照明 篠部拓、株式会社ピーエーシューウエスト/大道具 たつた舞台株式会社/小道具 和助/特殊効果 アトリエ・カオス/スタント 株式会社BOS-Entertainment/衣裳 松竹衣裳株式会社/床山 八木源かつら/ヘアメイク 國武剛、栗原佐代子/制作 井出亮、木下瑞、制作助手 出尾美貴、劇場管理 神田直美、技術監督 大田和司、春秋座劇場管理 舞台 大野淳一郎、照明 小山陽美、音響 神家洋志郎、舞台裏管理 結城敏恵、チケットセンター 関野遊子、玉岡結里子(以上、舞台芸術研究センター)/宣伝美術 出尾美貴/プログラムデザイン 吉羽一之(シンプルホープ)/企画制作 舞台芸術研究センター/協力 松竹株式会社、株式会社TOMABUNE、株式会社キノシ・オフィス、株式会社若柳流、株式会社オフィスタカヤ

##### 瓜生山サマーパーク

八月二二日(土)〜五日(火)一六時/会場 春秋座とその周辺/制作 井出亮、芝田江梨、斎藤翔世、制作助手 井川萌、出尾美貴、伊村千奈美、劇場管理 神田直美、技術監督 大田和司、春秋座劇場管理 舞台 大野淳